

# ソルフェージュ：明日のための教育法（1）

— 19世紀フランスのソルフェージュ —

テシュネ，ローラン  
訳・関根敏子

はじめに



例1. ラヴィニャック Lavignac, Albert\*1  
50 leçons de solfège manuscrites. Paris : Henry Lemoine, 1893, p.2.

未来をより良く準備するために現在をより良く理解する、これが、過去に対する研究のもっとも高度な目的である。

ソルフェージュにも同じことが言える。筆者は、ソルフェージュの起源について考察した研究\*2の後、3つの発展段階に分けて研究を続けていく予定である。

1. 19世紀フランスのソルフェージュ
2. フォルマシオン・ミュージカルにおけるソルフェージュ科（20世紀）
3. 現状と未来の展望

ソルフェージュの発展を追うことは、綿密な教育すべての役割へのオマージュでもある。すなわち教育とは、学生たちが人間に奉仕し、より良い世界のために現実の音楽的自立を果たし、真の芸術的創造性へとむかうための不可欠の道具を与えることである。

私はソルフェージュを愛している！

## 1. 19世紀フランスのソルフェージュ

### (1) 18世紀末フランスのソルフェージュ

18世紀末のフランスでは、イタリアのソルフェージュが以下のような革新性によって、フランスの「音楽の原理」よりも人気が高まっていた。

- 実践的な観点が多く、理論が少ない
- 生徒に通奏低音で自己伴奏させる
- ソルフェージュで母音唱法をおこなう（音名を使用しない）\*3

1768年の『イタリアのソルフェージュ *Solfèges d'Italie*』の出版\*4、ピッチーニ\*5とサッキーニ\*6のパリ移住（それぞれ1776年と1781年）は、その人気を証明している。

Leçons à changements de clés avec la clé de sol, la clé de fa et la clé d'ut 1<sup>re</sup> ligne.

7 Allegro, 60 = ♩  
DURANTE *mf*

例2. ドゥランテ Durante, Francesco (1684-1755)  
*Solfège des solfèges*. vol. 3A, Paris : Henry Lemoine, 1915, p. 8.

しかしながら、理論家や教育者は皆、伝統主義者であろうと革命派であろうと、視唱の重要性と「あらゆる音部記号の習得の必要性」\*7について意見が一致していた。

さらに一般的に見ると、フランスの伝統的音楽教育は、とりわけラモー\*8以来、多数の音楽家、理論家、またドゥニ・デイドロ Denis Diderot (1713-84) やジャン＝ジャック・ルソー Jean-Jacques Rousseau (1712-78) のような哲学者によって次第に問題視されていく。

フランスの音楽教育の構造（アカデミー\*9、メトリーズ\*10、マガザン\*11...）も、満足を与えない（あるいは、もはや与えない）。逆にナポリの音楽院は高く称賛される。「我々は今日、音楽学校を必要としている。グルック\*12はその必要性を感じていた」\*13。一般大衆から君主まで、最後には意見が一致して、以下のような決定がなされた。

「国王と王妃は、光栄にもパリにイタリアの音楽院の趣味における学校をという希望を私に示された。そこではオペラばかりでなく、ヴェルサイユの音楽のためにも臣下を育てるのである」\*14。

1784年の王立歌唱朗唱学校の開設は、部分的にだが、この希望に答えているように思われる。

ゴセック\*15は、その方針を確保し、声楽を補うものとして週3回の割合で3時間の講義を

おこなうソルフェージュ教育を創始した。

次に1789年の革命が勃発し、サレット\*16は音楽家団体の責任者に任じられた。この組織から、1792年に国民軍の音楽学校が創設され、1793年に国民音楽学校となる。割り当てられた講義には、1時間のソルフェージュ・レッスン2回（教授陣の中に、カテル\*17の名前が見出される）と週3回の楽器レッスンが含まれる。



例3. カテル Catel, Charles-Simon  
*Solfège des solfèges*. vol. 3C, Paris : Henry Lemoine, 1910, p. 51.

最後に、国立（旧王立）音楽院と国立歌唱朗誦学校が統合され、1795年にパリ音楽院が創設された。サレットが院長となり、ゴセック、グレトリ\*18、メユール\*19、ケルビーニ\*20、ルシュール\*21が音楽査察官をつとめ、建物にはベルジェール街にあるムニュ・プレジール\*22の広間が使用された。

(2) パリ音楽院のソルフェージュ（1795-1830）

教育は4つの部門すなわち、ソルフェージュ、器楽、声楽、作曲に分けられた。

最初の年度から、115人の教授が351人の学生を無料で担当した。ソルフェージュ教授として、イタリア人作曲家・ヴァイオリニストで1778年にロンドンからパリへ移住したジョセフ・アギュス Joseph Agus (1749-98)、ピアニスト・作曲家のアンリ＝ジャン・リジェル\*23、ピエール・デヴィーニュ\*24などを挙げておこう。ソルフェージュの教科書は『イタリアのソルフェージュ』と1799年にソルフェージュ教授に任命されたロドルフ\*25の『ソルフェージュ *Solfèges*』であった。

音楽院は一挙に学生用教科書の執筆に着手する。14年間に17の教則本が出版され、19世紀全体を通じて使用された。ソルフェージュに関しては、フランスとイタリアの方式を統合した2つの教則本すなわち『音楽の基本原理 *Principes élémentaires de musique*』（1800）と『音楽院のソルフェージュ *Solfèges du Conservatoire*』（1801）が出版される。

執筆に参加したソルフェージュ教授としては、モナコ出身の作曲家オノレ・ラングレ Honoré Langlé (1741-1807)、ルシュールとメユール、さらにドイツ出身のフランスの作曲家で、《愛の喜びは》(1780)だけでなく、反政府的態度でも有名だったジャン＝ポール＝ジル・マルティニ\*26がいた。

EDITION DE "L'ORPHÉON"

SOLFÈGE  
DE  
RODOLPHE

*En clés de SOL et de FA à l'Unisson*

Sans accompagnement

Transcrit par

Albert MONSÉGUR

G. LEBLANC

Editions Musicales "L'ORPHÉON"

70, RUE DES RIGOLLES PARIS XX<sup>e</sup>

- 例4. ロドルフ Rodolphe, Jean-Joseph  
*Solfèges*. Paris, 1895.



- 例5. ラングレ Langlé, Honoré  
*Solfège des solfèges*. vol. 3B, Paris : Henry Lemoine, 1912, p. 43.

1819年、ソルフェージュの講義の学生数がクラスごとに15人に限定され、ローマ賞を獲得したばかりの若い作曲家アレヴィ<sup>\*27</sup>がソルフェージュの教授陣に加わった。

1822年、音楽院の校則によって次のものが推奨された。「ソルフェージュ教育のためには、『イタリアのソルフェージュ』、『音楽院のソルフェージュ』、『ロドルフのソルフェージュ』、さらには、『レオ、アプリレ、カファロ<sup>\*28</sup>のソルフェージュ』がある」<sup>\*29</sup>。

声楽専門の作曲家オギュスト・パンスロン Auguste Panseron (1795-1859) は、グレットリの弟子、ロッシーニとサリエリの友人で、1813年にローマ賞を獲得、1826年に声楽教授に任命され、ソルフェージュに関する著作を出版した——『音楽のABCあるいはソルフェージュ *ABC Musical, ou Solfège*』(1841)、『音部記号の変化による36の練習曲 *36 Exercices à*

*changements de clefs*』(1855)、『芸術家のソルフェージュ *Solfège d'artiste*』(1842)など。

Allegro. Aprile.  
fa sol  
la si  
do re sol fa sol fa

例6. アプリレ Aprile, Giuseppe  
*Solfège*. Nr. 984, Leipzig : Peters, 1932.

ÉDITION CLASSIQUE A. DURAND & FILS



N° 11824

## SOLFÈGE D'ARTISTE

Contenant 124 leçons sur toutes les clés  
et à changements de clés

PAR

A. PANSERON

SUITE

DE

L' A, B, C MUSICAL



Moderato (Maelzel  $d = 76$ )  
pliez bien les sons

DURAND & C<sup>ie</sup>, Éditeurs, Paris  
4, Place de la Madeleine, 4  
United Music Publishers Ltd, Londres.  
Elkan - Vogel C<sup>o</sup>, Philadelphia, Pa (U. S. A.)  
Déposé selon les traités internationaux. Propriété pour tous pays.  
Tous droits d'exécution, de traduction, de reproduction et d'arrangements réservés.  
MADE IN FRANCE  
IMPRIMÉ EN FRANCE

例7. パンスロン Panseron, Auguste  
*ABC Musical* (Paris, 1841). Paris  
: Philippo, 1925.

例8. パンスロン Panseron, Auguste  
*Solfège d'artiste* (1842). Paris :  
Durand, 1935.

・ 地方と外国の音楽院におけるソルフェージュ

同じ時期にそして1800年以後、サレットはパリ音楽院を手本としてフランス各地に音楽学校を創設しようと考えた。そこでも教育は無料で、上述の著作が使用された。ただし、どこかの学校でまったく別の教則本を使用しようと考えた場合には、あらかじめパリ音楽院当局の許可を得なければならなかった。

フランス以外でも、たとえばベルギーのフェティス\*<sup>30</sup>のようにパリ音楽院で教育を受けた数人の教育者が、故国へフランスのソルフェージュの色を強くもたらすことになる。

**36 LEÇONS DE SOLFÈGE** 1  
*A CHANGEMENTS DE CLÉS*  
 données depuis 1835 jusqu'à 1871  
 AU CONCOURS DU CONSERVATOIRE ROYAL DE BRUXELLES

par **F. J. FÉTIS** CONCOURS DE 1835

例9. フェティス Fétis, François-Joseph  
*36 leçons de solfège* (1835-1871). Paris : Henry Lemoine, 1923.

・ 礼拝堂付き少年聖歌隊\*<sup>31</sup> (1814-30)

声変わりするまで声が良くて選ばれた少年たちは、19世紀に短い「復古」を知ることになる\*<sup>32</sup>。彼らは、ルイ16世時代の少年聖歌隊にいたルイ＝エマニュエル・ジャダン Louis-Emmanuel Jadin (1768-1853)の指導により、音楽院でソルフェージュの講義を受けた。

(3) 19世紀フランスの私的音楽教育におけるソルフェージュ

19世紀における音楽教育の最も重要な点は、プライベート・レッスン、教会聖歌隊、数少ないが地方の音楽院などに見出される。その例として、ここでは1836年の『音楽手帳 *Agenda musical*』に掲載されたパリのプライベート・レッスン・リストを挙げておこう。

ピアノ=49、ヴァイオリン=43、声楽=33、ソルフェージュ=16、ハープ=10、ホルン=8、フルート=7、クラリネット=7など。

いくつかのレッスンは、「ソルフェージュ競争」の真のモデルとなる。「パストゥ氏\*<sup>33</sup>は、

これ以上考えられないほど難しい音程、リズム、和声を生徒に実践させた。子供たちにこのような結果をもたらす教育法は、明らかに音楽芸術の深い知識を広めるのにもっともふさわしいものである]\*<sup>34</sup>。

これらのレッスンや学校の幾つかには、多少なりとも独創的なメソッドを教える自由があった。そのため時には音楽院の「公的」教育\*<sup>35</sup>に多大な影響を与えることになるか、少なくともソルフェージュに関する教育学的考察に貢献したのである。以下に、もっとも有名なものを挙げておく。

・フレデリク・マシミノ Frédéric Massimino (1775トリノ-1858パリ)は、1815年にパリに定住して、有名なレッスンをおこない、1819年に『新しいメソッド…*Nouvelle Méthode*…』、次にかんがりの成功を収めた『ソルフェージュ*Solfèges*』を出版した。レッスンは、生徒が書きながら学ぶという原則によって展開された——「教師が歌うかピアノで弾いて書き取らせ、生徒が書き終わったなら、書き取ったものを歌い、さらに教師が訂正したものを歌う…」\*<sup>36</sup>

・ギャラン＝パリ＝シュヴェ学校 (1817-1939)

ピエール・ギャラン Pierre Galin (1786-1821)によってボルドーに、次にエメ・パリ Aimé Paris (1798-1866)とエミール・シュヴェ Émile Chev  (1804-64) によってパリと地方に設立

## M THODE GALINISTE

### 146. — Principes essentiels de la m thode galiniste ou m thode chiffr e.

a) **Notes:** 1. Non alt r es. Se repr sentent par les chiffres 1. 2. 3. 4. 5. 6. 7. correspondant aux noms de notes do. r . mi. fa. sol. la. si.

2. Di s es (ou alt rations ascendantes). Les chiffres pr c dents sont travers s par un accent aigu

             
pour do , r  , mi , fa , sol , la , si , qu'on prononce l , r , m , f , j , l , s .

3. B molis es (ou alt rations descendantes). On emploie l'accent grave

             
pour do , r  , mi , fa , sol , la , si , qu'on prononce leu, reu, meu, feu, jeu, leu, seu.

4. Registres. a) m dium, le chiffre tel quel 1. 2. 3. 4. 5. 6.

b) grave, le chiffre au-dessous duquel on met un point 1. 2. 3. 4. 5. 6.

c) aigu, le chiffre surmont  d'un point 1. 2. 3. 4. 5. 6.

b) **Valeurs.** Les croches, doubles croches, etc., sont marqu es par autant de barres horizontales qu'il y a de crochets.

Le temps est repr sent  par tout chiffre isol  ou par les chiffres plac s sous un seul trait horizontal.

Ex.: (1 temps) 5 (1 temps) 1 3 5

Pour prolonger la dur e d'une valeur on met un point   droite du chiffre.

Ex.: (1 temps) 4.

c) **Silence.** Marqu  par un z ro.

Ex.: (1 temps) 3 0

d) **Mesure** Les barres de mesure existent comme dans la notation ordinaire. Bien entendu la port e est absente.

Le chiffnage ne s'emploie pas.

e) **Armure.** N'existe pas.

### 例10. ギャラン＝パリ＝シュヴェ学校のメソッドの例

Blareau, Ludovic, *La musique*. Paris : Fernand Nathan, 1909, p.211より

された。この学校は、J.-J.ルソーからヒントを得た数字記譜法(ド=1~シ=7)<sup>\*37</sup>を作り出し、音楽学習の初心者にもっと受け入れやすくしたと考えられている<sup>\*38</sup>。

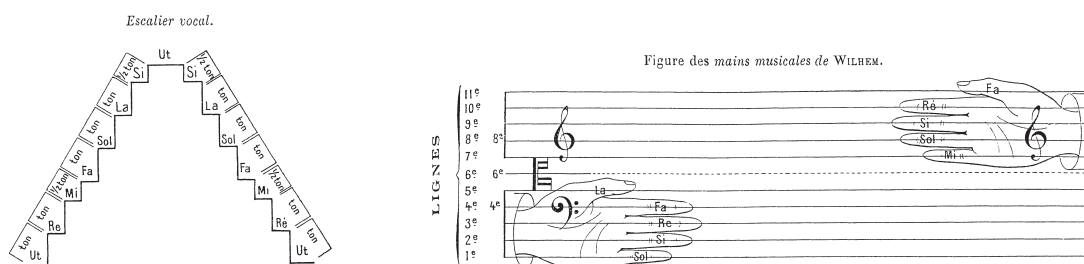
・ ショロン<sup>\*39</sup>の学校

1816年にルイ18世からオペラ座監督に任命されたアレクサンドル=エティエンヌ・ショロンは、翌年に自身の歌唱学校を創設し、「集中教育法」によってグループごとにソルフェージュを教えた。すなわち、ひとりの教師が100~200人の生徒を担当し、生徒の中で優秀な者たちが交互に出来の悪い仲間たちの復習を手伝った。「…主目的は視唱であり、書くことはまったくしない。音程とリズムが授業の目的なのである」<sup>\*40</sup>。ショロンは、昔の宗教的レパートリーをとりわけ好んでいたので、その歌唱教育概念は音楽院のものとはかなり異なっていた。

・ ギヨーム・ボキヨン=ヴィレム Guillaume Bocquillon-Wilhem (1781-1842)

音楽院の卒業生であるボキヨン=ヴィレムは、いくつかの教則本を出版した。そのひとつが『音楽の手引き *Manuel musical*』(1839)である。その相互教育法は、イギリスでアンドリュー・ベルとジョゼフ・ランカスター<sup>\*41</sup>が始めたものからヒントを得ている。それは、労働者階級への集団教育の要求に応じたものであった—「100人ほどの生徒からなる1クラスが、20人ずつのグループに分けられる。個々のグループは、上級の生徒にゆだねられ、全体はひとりの教師によって監督されている」<sup>\*42</sup>。ここでは視唱、リズム、音程、聴音、エクリチュール(書法)、歌などを学んだ。

ボキヨン=ヴィレムは、1833年に「オルフェオン」<sup>\*43</sup>を設立し、その目的を合唱の訓練と普及とした—「30分は理論とソルフェージュ、もう30分は歌の練習、これらの条件があつてこそ、この教育が有益なのである」<sup>\*44</sup>。



例11. ボキヨン=ヴィレム Bocquillon-Wilhem, Guillaume  
*Encyclopédie de la musique et dictionnaire du conservatoire*. Paris, 1934, p. 358-359.

・ ニーデルメイエル学校 (ショロン学校の再開) (1853-1939)

1853年、皇帝の勅令によって古典宗教音楽学校の創設が認可され、校長にはニーデルメイエル<sup>\*45</sup>がなり、3部門からなる教育が割り当てられた。



ソルフェージュ：明日のための教育法（1）

1. 音楽教育＝ソルフェージュ、声楽、単旋律聖歌、オルガン、和声、対位法、フーガ、楽器法など。

2. 一般教育

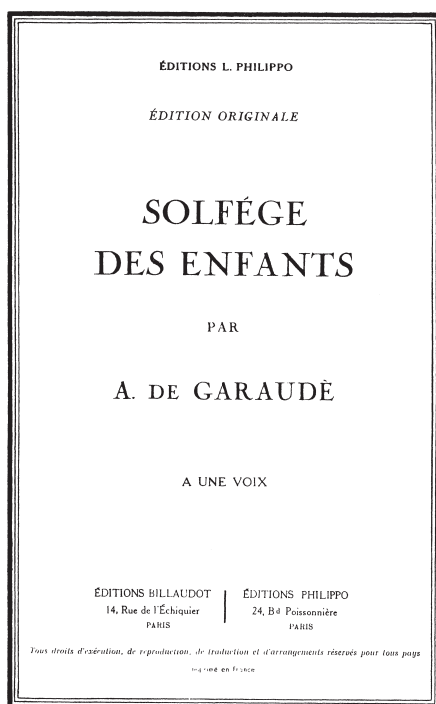
3. 宗教教育

校則では、すべての学生が楽器を始める前にきちんとした視唱ができねばならないと明示されていた。

サン＝サーンスの著作『学校さぼり *Ecole buissonnière*』（1913）によれば、ソルフェージュ教育の体系は、ゴットフリート・ヴェーバー *Gottfried Weber*（1779-1839）によって考案され、ピエール・マルデュー *Pierre Maledew* がドイツから持ち帰り、ニーデルメイエル学校で教えたという\*46。

次に、ソルフェージュの教育者とその教育法を幾つか挙げておこう。

- ・アルドゥアン\*47、『音楽原理、音楽課題、続いて二重唱曲 *Principes de la musique ; Leçons de musique suivies de duos*』（Charleville, 1790）。
- ・ガローテ\*48、『数字付低音を伴うソルフェージュ、あるいは新しい音楽メトード *Solfège*



例12. ガローテ *Garaudé, Alexis de*  
*Solfège des enfants*. Paris : Philipppo, 1923.

*avec la basse chiffrée, ou nouvelle méthode de musique*] (Paris, 1810)。

- ・マンジャンMangin、『質問と回答によって割り振られた音楽の基本原理*Elémens de musique distribués par demandes et réponses*』(Nancy, 1801)。この著作は、クラヴォーClaveauの『音楽の初歩原理*Principes élémentaires de musique*』(Poligny, 1815) にヒントを与えることになる。
- ・バイユーBailleux、『声楽と器楽を容易に習得するためのソルフェージュ*Solfèges pour apprendre facilement la musique vocale et instrumentale*』(Paris, 1820)<sup>\*49</sup>。
- ・アンドレ・ルデュイAndré Ledhuy、『音楽論*Traité de musique*』(Paris, 1833)。
- ・シェラール<sup>\*50</sup>、『4声部のソルフェージュ*Solfèges à 4 voix*』。
- ・アドルフ・ル・カルパンティエAdolphe Le Carpentier (1809-69)、『子供用ソルフェージュ*Solfège pour les enfants*』(1855)。ル・カルパンティエは、生涯を音楽教育に捧げた。
- ・サミュエル・ダヴィドSamuel David (1836-95)、『拍節による演奏法*Art de jouer en mesure*』(1862)。ダヴィドは、1858年ローマ賞受賞。
- ・コーエン<sup>\*51</sup>、『音楽家の学校、あるいはソルフェージュの理論と実践*Ecole du musicien ou Solfège théorique et pratique*』(1862)。この著作は音楽院の教育委員会で称賛された。

さらに「マンシャガMenchaga、フレモンFrémond、デイカンD'Eyquemによる『単純化された記譜法*Les notations simplifiées*』、デルカソDelcassoの『実用的教則本*Méthode directe*』、その他ローラン・ド・リレLaurent de Rillé、デュペーニュDupaigne、コンバリュールCombarieuの教則本がある…」<sup>\*52</sup>

最後に、大まかに以下のことも書き留めておこう。「譜表上の速記法」の体系は、オノレ・ブランHonoré Blancが、『オキグラフィ、あるいは言葉のあらゆる音をすばやく書き記す法*Okygraphie ou l'art de fixer, par écrit, tous les sons de la parole*』(Paris, 1801)の中で発表したものである。ドイツ人のメルツェルJohann Nepomuk Maelzel(1772-1838)がメトロノームの特許を獲得したのは、1816年パリであった。目の見えない人々のためにルイ・ブラユLouis Braille (1809-52)は、浮き彫り記譜法テクニックを開発した(1837)。ピッチの振動数は、フランスで1859年に435Hzが標準とされ、1885年に国際標準となった。

#### (4) パリ音楽院のソルフェージュ (1830-71)

1830年、ケルビーニが院長に任命された。そしてソルフェージュの試験に多数の試験曲を書く。これは後に音楽出版社ウジェル社によって1880年に2つの曲集としてまとめられた。『音楽院のソルフェージュ、第7巻、あらゆる音部記号、あらゆる長調と短調によるレッスン、第8巻、予備レッスンとコンクール用レッスン*Solfèges du Conservatoire, Livre VII Leçons sur toutes les clefs, dans tous les tons majeurs et mineurs, Livre VIII Leçons préparatoires et de concours*』。



例13. ケルビーニ Cherubini, Luigi\*53  
*Solfège des solfèges*, vol. 3E, Paris : Henry Lemoine, 1920.

1837年、ソルフェージュの教授陣はローマ賞受賞者を次々と受け入れる。そのなかにはアルカン\*54、ピアニストで作曲家のルイ＝デジレ・ベゾッツィ\*55、作曲家のポール＝エミール・ビアンメ Paul-Émile Bienaimé (1802-69)、ヴァイオリニスト、ピアニスト、作曲家のエドゥアール・ミヨール Edouard Millault (1808-87)、音楽院の演奏協会の声楽指揮者のジョルジュ・キューヌ Georges Kuhn等々がいた。

1842年、オベール\*56がケルビーニの後を継いで院長となり、音楽院における教育をソルフェージュ、声楽、オペラ・デクラマシオン、ピアノ・ハーブ、弓奏楽器、管楽器、和声・オルガン・作曲、演劇デクラマシオンという8つの部門に分けた。

ソルフェージュは、ひとつがグループ、もうひとつが個人の2部門に分けられた。

新しいソルフェージュ教授として、1863年の場合を以下に挙げておく。バティスト\*57、ピアニスト・作曲家のエミール・ジョナス Emile Jonas (1827-1905)、オルガニスト・作曲家のテオドール・サロン Théodore Salom (1834-96)、作曲家のテオドール・ミュザン Théodore Muzin (1818-50)、作曲家で教育者のエミール・デュラン\*58、ピアニストで教育者のフェリクス・ル・クペ\*59、「タルト Tartot、デュヴェルノワ Duvernoy、サヴァール\*60、ゴブラン Goblin、ロロット Lorotte、メルシエ＝ポルト Mercié-Porte、モコール＝デルサック Maucorps-Delsac、デュピュイ＝リュステンホルツ Dupuis-Ruestenholz、ルフェーブル Lefèvre」\*61等々。



例14. バティスト Batiste, Edouard  
*Leçons de solfège sur toutes les clés (?)*, p.1.

・軍楽ギムナジウム Gymnase musical militaireでのソルフェージュ (1836-70)

内閣決定により創設されたギムナジウム\*62は、音楽家を軍隊に提供することを目的として

いた。ソルフェージュは、音楽院の教授によっておこなわれ、ヴィレムの教則本が用いられた。この軍隊「付属」は、レベルの問題で閉鎖された。

## (5) 19世紀フランスの一般教育におけるソルフェージュ

### 1. 小学校教育（約7-11歳） 初等教育

1835年、パリ市議会はヴィレム<sup>\*63</sup>教則本の採用を決定した。

「1883年、その目的はできる限り難しい理論を避けながら子供たちに音楽への意欲を起こさせることである。ト音記号、次にヘ音記号による視唱、音程の練習、リズム、歌、聴音…」<sup>\*64</sup>。

1905年、ギャラン＝パリ＝シュヴェ<sup>\*65</sup>の数字記譜法が伝統的な教育法に加えられた。

### 2. 中高教育（約12-18歳） 中等教育課程の公立学校

1802年、法律によって音楽の勉強は任意であるとされたが、1865年にヴィクトール・デュリュイ<sup>\*66</sup>が4年生（約14歳）までとした。

ガブリエル・ピエルネ<sup>\*67</sup>の指導のもとで、パリのリセの合唱団が1905年に創設された。

### 3. 大学

大学での音楽教育は、19世紀には存在していなかった(ジュール・コンバリュエ Jules Combarieuは、1893年にソルボンヌで音楽学学位論文(文学士)の公開審査を受けた最初の人物である)。

#### ・レジオン・ドヌール勲章学校

レジオン・ドヌール勲章は1802年に創設され、次に1805年からレジオン・ドヌール勲章授受者の貧しい娘たちの教育用の建物が設けられた。

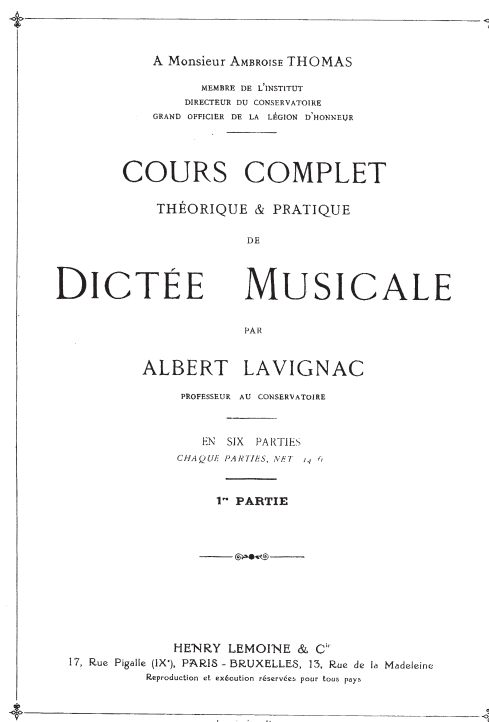
1807年、ナポレオンは王妃マリー・アントワネットの元外人語学講師カンパン夫人を校長に任命した。

そこでの教育は、宗教、一般教育、裁縫手芸、芸術（ダンス、音楽：ソルフェージュ、ピアノ、歌など）であった。1820年からはフレデリク・マシミノ<sup>\*68</sup>が教えている。

## (6) パリ音楽院のソルフェージュ（1871-1905）

1871年、アンブロワーズ・トマ<sup>\*69</sup>が院長に任命され、音楽院で聴音<sup>\*70</sup>を公認するようになった。「私はソルフェージュのあらゆる試験とコンクールの科目として聴音を課した。この件に関して音楽院で用いられる教育法から欠落していたことを残念に思っていたからである。聴音は、優れた視唱をするだけにとどまらず、それなしでは完全に音楽家ではない耳の教育を与えようと熱望している教授たちにとって貴重な助けとなるであろう」<sup>\*71</sup>。

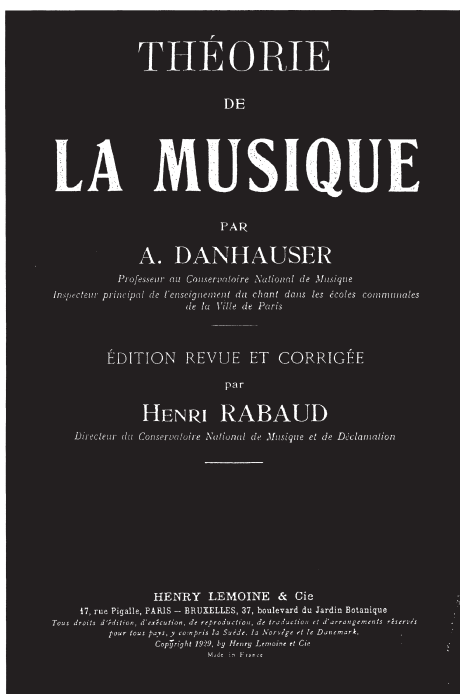
ラヴィニャック\*72がソルフェージュ教授に任命され、1882年に記念碑的な『聴音の理論と実践の完全なる講義 *Cours complet, théorique et pratique, de dictée musicale*』を出版する。2巻の中には教育上の指示と4483もの聴音課題が含まれ、体系的な進度に応じて6部に分けられている—1.アントナシオン（音程／半音階…）、2.リズム（練習課題／付点、スラー／休符…）、3-4-5-6.難易度別の聴音課題。



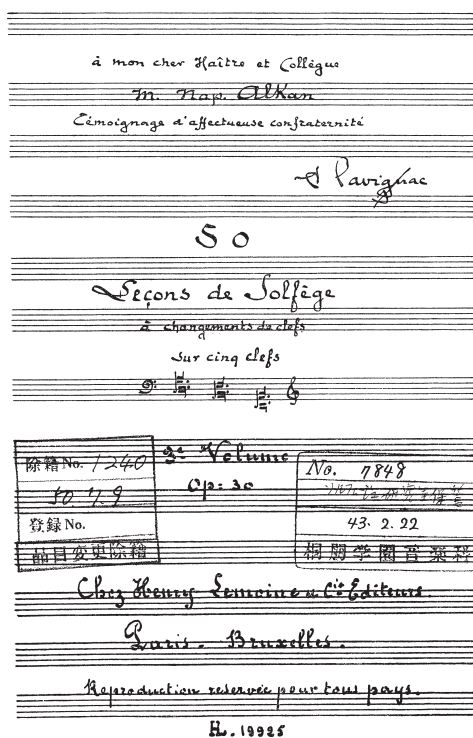
例15. ラヴィニャック Lavignac, Albert  
*Cours complet, théorique et pratique, de dictée musicale*. Paris : Henry Lemoine, 1890.

もうひとり重要な教育者がソルフェージュの教授陣に加わる。それがダノーゼル\*73である。名高い『音楽理論 *Théorie de la musique*』\*74が1872年に出版された後、1879年の『質問表…付録 *Questionnaire…appendice*』をはじめ多数の著作が続く。

その他の新しい教授陣を挙げておこう。アントナン・マルモンテル\*75は、ピアニストで作曲家、1873年にローマ賞受賞、とりわけ『初歩の音楽、ソルフェージュと歌 *La première année de musique, solfège et chants*』(1886)、『初見演奏法 *L'art de déchiffrer*』を出版した。ナポレオン・アルカン Napoléon Alkan(1826-1910)は、シャルル＝ヴァランタン＝モランジュ・アルカン Charles-Valentin-Morhange Alkanの兄である。



例16. ダノーゼル Danhauser, Adolphe  
*Théorie de la musique* (1872). Paris  
 : Henry Lemoine, 1924.



例17. ラヴィニャック Lavignac, Albert  
*50 Leçons de solfèges manuscrites.*  
 Paris : Henry Lemoine, 1893.

1878年、ソルフエージュ教育は声楽家と楽器奏者用にはっきりと分けられた。

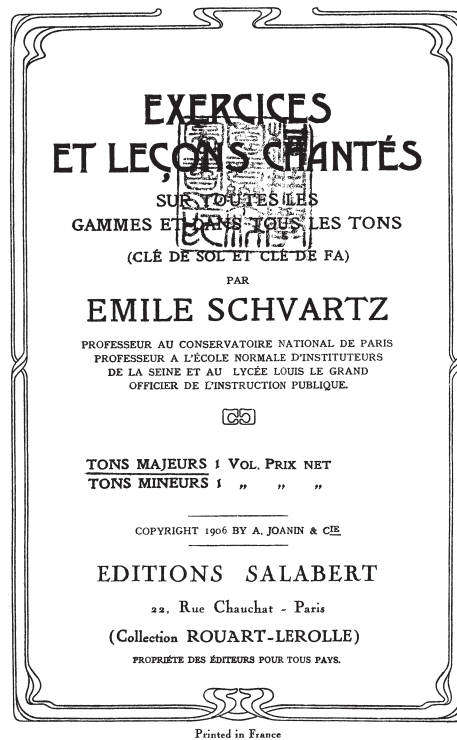
1896年にテオドール・デュボワ\*76が院長に任命された。手書きソルフエージュの流行は全盛期を迎える。なぜなら、音部記号を変化させる手書き試験が、音楽院の試験とコンクールに課せられたからである。

19世紀末頃に任命されたソルフエージュ教授の中には、以下のような者がいる。ヴィオラ奏者・作曲家エミール・シュヴァルツÉmile Schvartz (1858-1928)は、『視唱の理論と実践概論 *Traité théorique et pratique de lecture musicale*』、『聴音概要 *Précis de dictée musicale*』など莫大な数の教育的著作を書いた。リュシアン・グランジャンLucien Grandjany (1862-91)は『聴音 *Dictées*』を著した。その他、アンリ・ケゼルHenry Kaiser (1861-?)、ポール・ヴィダルPaul Vidal (1863-1931)、オギュスタン・サヴァール\*77などがある。

1894年、校則によってクラスごとに勉強期間が定められた。ソルフエージュの場合は4年である（声楽と同じ）。

以来、ソルフエージュ本来の講義には3つの明白な内容が含まれている。

- ・音楽理論と最小限の理論のための最大限の実践的知識。
- ・本来のソルフエージュ、すなわち音程とリズムの感覚を発展させるための視唱練習。



例18. シュヴァルツ Schvartz, Émile  
*Exercices et leçons chantés*. Paris Salabert, 1915.

・聴音\*78

19世紀における音楽院のソルフェージュ教育のこれらのページに、その後、この学校の次なる院長ガブリエル・フォーレとともに新しい息吹がもたらされることになる。

## 年表

一般歴史	文化的出来事
1789 フランス大革命	1790 モーツァルト：《コシ・ファン・トゥッテ》
1792 君主制の崩壊→「第一共和国」	1792 ルジェ・ド・リル：《ラ・マルセイエーズ》
1793 ルイ16世とマリー・アントワネットの処刑	1794 メユール：《出発の歌》
1795 総裁政府(執政官時代)	1797 ケルビーニ：《メデ》
1799 統領政府	1798 ハイドン：《天地創造》
1804 帝政→ナポレオン1世	1803 ローマ賞創設 ゲーテ：『ファウスト』
1815 王政復古→ルイ18世(ルイ16世の弟)	1804 ルシュール：《オシアン》
1824 シャルル10世(ルイ16世の下の弟)	1810 カテル：《インドの舞姫》
1830 ルイ=フィリップ(シャルル10世の従兄弟)	1819 ジェリコ：『メデューズの筏』
1848 革命、次に「第二共和国」	1823 ベートーヴェン：交響曲第9番
1852 第二帝政→ナポレオン3世	1826 メンデルスゾーン：《真夏の夜の夢》
1870 晋仏戦争	1828 ベルリオーズ：《幻想交響曲》
1871 「第三共和国」	1830 ユーゴー：『エルナニ』
	1841 ヴァーグナー、パリで《さまよえるオランダ人》を書き終える
	1852 サン=サーンス：《聖チェチリアのオード》
	1856 フローベール：『ボヴァリー夫人』
	1859 グノー：《ファウスト》
	1866 ドストエフスキー：『罪と罰』
	1875 ビゼー：《カルメン》
	1885 ゴッティエ：『ジェルミナール』
	1889 万国博覧会(エッフェル塔)
	1890 モネ：『睡蓮』
	1900 フロイト：『夢の解釈』
	1901 ドビュッシー：《ペレアスとメリザンド》

## 注

- 1 Lavignac, Albert (1846-1916) フランスの教育者、音楽学者、音楽院でマルモンテルとトマに師事。
- 2 「フランスにおけるソルフェージュ」テシュネ、ローラン、昭和音楽大学『研究紀要』第18号(1998)、p.75-96.
- 3 「生徒がすべての注意を正確さにむけることができるように」(Mancini, Giambattista, *Art du chant*. Paris, 1776, p.23)



- 4 Bêche, Jean-Louis (1731-?) と Levesque, Pierre (1724-97) による。
- 5 Piccini, Nicola (1728-1800) イタリアの作曲家、レオLéoとドゥランテDuranteの弟子、50のオペラを作曲、王妃マリー＝アントワネットの招待でパリを訪れる。
- 6 Sacchini, Antonio (1730-86) 作曲家、ドゥランテの弟子。フランス趣味のために書き直したオペラの作曲家。
- 7 Lescat, Philippe, *L'Enseignement musical en France* (Fuzeau 2001), p.92.
- 8 Rameau, Jean-Philippe (1683-1764) フランスの作曲家。そのメソッドは、音楽研究の単純化と合理化をめざしていた。
- 9 ここではパリの多少なりとも公的な音楽学校のこと。また声楽においては、パリもしくは地方における多少なりとも公的なもの。
- 10 声の良い少年を選んで声変わりするまで集めた聖歌隊。教会が無料で世話をする代わりに礼拝時に歌う。
- 11 L'École de Chant du Magasin de l'Opéra (1712-1784) 1672年、ルイ14世はリュリに「パリの中に音楽学校も設立できる」特権を与えた。生徒は声の良い若い男女である。
- 12 Glück, Christoph Willibald (1714-87) オーストリアの作曲家。多数のオペラを書く。パリでマリー＝アントワネットの庇護を受けた。
- 13 Mercier, Louis-Sébastien, *Tableau de Paris* (1783), Chapitre "Glück".
- 14 "Lettre du Baron de Breteuil à Monsieur de Calonne", 19 décembre 1783, Archives nationales an, 01/618 no.43.
- 15 Gossec, François-Joseph (1734-1829) フランドル出身のフランスの作曲家。1751年、ラモアの庇護の下、パリに定住。
- 16 Sarrette, Bernard (1765-1858) フランスの軍人。1789年の革命のおかげで音楽管理者となる。
- 17 Catel, Charles-Simon (1773-1830) フランスの作曲家、教育者。
- 18 Grétry, André-Ernest-Modeste (1741-1813) ベルギー出身のフランスの作曲家。イタリアで学び、パリに定住 (1768)。
- 19 Méhul, Etienne-Nicolas (1763-1817) フランスの作曲家。
- 20 Cherubini, Luigi (1760-1842) イタリアの作曲家。ベートーヴェン、ヴァーグナー、ブラームスに賛美された。1787年パリに定住。
- 21 Lesueur, Jean-François (1760-1837) フランスの作曲家。
- 22 Hôtel des Menus Plaisirs これは1740年頃にヴェルサイユに建てられ、宮廷で催される祝祭の小道具や装置などを保管していた場所。1786年、その2階に「三部会の広間」が設けられた。
- 23 Rigel, Henri-Jean (1770-1852) ドイツ出身のフランスの音楽家一族に生まれる。父親の Henri-Joseph (1741-99) も王立歌唱朗唱学校でソルフェージュを教えている。
- 24 Desvignes, Pierre (?-1827) ルシュールの弟子、シャルトル大聖堂、次にパリのノートルダム

- 大聖堂の楽長をつとめ、ミサ曲（複数）を書いている。
- 25 Rodolphe, Jean-Joseph (1730-1812) アルザス出身のホルン奏者、ヴァイオリニスト、作曲家。モーツァルトとグレトリを賛美し、1784年には自身の教則本『ソルフエージュあるいは新しい音楽教則本 *Solfège ou nouvelle méthode de musique*』を出版した。
- 26 Martini, Jean-Paul-Gilles (1741-1816) 1787年に王妃マリー・アントワネットのコンサート監督を務めていた。1793年には《国王のための祈り》を作曲した。
- 27 Halévy, Jacques-François-Fromental (1799-1862) ユダヤ出身のフランスの作曲家、ヴァーグナーに高く評価された。娘がジョルジュ・ビゼー Georges Bizet (1838-75) と結婚。1857年に『音楽視唱レッスン… *Leçons de lecture musicale*…』を出版した。
- 28 イタリア人作曲家で教育者のレオ Leo, Leonardo (1694-1744)、イタリア人作曲家・カストラートで、モーツァルトが称賛したアプリレ Aprile, Giuseppe (1732-1813)、イタリア人作曲家カファロ Cafaro, Pasquale (1715-87)。
- 29 Constant, Pierre, *Le conservatoire national de musique et de déclamation* (Paris, 1900), p.249.
- 30 Fétis, François-Joseph (1784-1871) ベルギーの音楽学者・作曲家、1833年にブリュッセル音楽院の院長となる。
- 31 1768年に『イタリアのソルフエージュ』が作成されたのは、彼らのためであった。
- 32 1814年に王政復古の際、ルイ18世はかつての国王の礼拝堂付き少年聖歌隊を復活させ、シャンブル（室内楽）とシャペル（礼拝堂）組織の所属とした。
- 33 Pastou, Etienne-Baptiste (1784-1851) フランスの作曲家・教育者。音楽院でもソルフエージュを教えた。
- 34 Berlioz, Hector (1803-69), Au directeur de la Sylphide, No.790 de *La correspondance générale*, décembre 1842.
- 35 例を挙げると、聴音は、音楽院で認められるよりも (1871) かなり前から私的レッスンで教えられていた。
- 36 Lescat, Philippe, *op.cit.* p.139.
- 37 作曲家アルフォンス・ティス Alphonse Thys (1807-79) は、この教育法を支持したが、グノー、ヴェルディ、ベルリオーズは激しく反対した。
- 38 生徒たちは、それにもかかわらず、音名を歌いながらソルフエージュをしていた。また、聴音して書くこと、初見で、あらゆる音部記号で読むことを学んだ。
- 39 Choron, Alexandre-Etienne (1771-1834) フランスの音楽評論家、教授、編集者、作曲家。1836年にパリで出版された『音楽の完全な手引き… *Manuel complet de musique*…』の著者。
- 40 Jomard, *Rapport présenté au conseil d'administration de la société pour l'enseignement mutuel* (Paris, août, 1819), p.69.

- 41 アンドリュウ・ベル Andrew Bell (1753-1832) とジョゼフ・ランカスター Joseph Lancaster (1778-1838) は、英語の教師。
- 42 Lescat, Philippe, *op.cit.* p.167
- 43 一般の男性と子供の集まり。その目的は合唱の訓練と普及にあった。ヴィレムの後は、シャルル・グノー Charles Gounod (1818-93) が指揮者となる。
- 44 Reuschel, A., *L'art du chef d'Orphéon*, Paris, 1906, p.15.
- 45 Niedermeyer, Louis (1802-61) スイス出身のフランスの作曲家、教育者。ウィーンでモシェレス Moscheles (ピアノ) に師事。
- 46 この体系では、和音それ自体だけでなく、それが置かれている音度に従っても考えられる。[訳注：機能和声の導入]
- 47 Hardouin, Henri (1727-1808) フランスの作曲家。
- 48 Garaudé, Alexis de (1779-1852) フランスの作曲家、パリ音楽院の音楽教授。
- 49 『イタリアのソルフェージュ』 への一種の入門書。
- 50 Chélard, Hippolyte (1789-1861) フランスのヴィオリン奏者、作曲家。ドイツではベルリオズの先駆者と考えられている。
- 51 Cohen, Alphonse (1829-1901) フランスのヴァイオリン奏者、作曲家。1852年にローマ賞受賞。著作には他に『音楽理論 *Théorie de la musique*』、『視唱 *Lecture musicale*』、『あらゆる音部記号の練習 *Etude de toutes les clefs*』 (1868)。
- 52 Joubert, Claude-Henry, *Métier : Musique!* vol. 2 (Paris : IPMC, 1988), p.94.
- 53 注20参照。
- 54 Alkan, Charles-Valentin-Morhange (1813-88) ユダヤ系フランス人ピアニスト、作曲家。当時はショパン (パリに1831年定住) とリスト (1811-86) の陰に隠れていた。
- 55 Besozzi, Louis-Désiré (1814-79) 1868年にパリで『合唱音楽…無伴奏ソルフェージュ *Musique Chorale…Solfèges sans accompagnement*』を出版した。
- 56 Auber, Daniel-François-Esprit (1782-1871) フランスの作曲家。スクリーブ Scribe とともに最良のオペラ提供者となる (《ボルティチの啞娘》など)。『音部記号の変化によるソルフェージュ・レッスン集 1842-69 *Recueil des leçons de solfège à changements de clef 1842-69*』 (Paris, 1886) を執筆。
- 57 Batiste, Edouard (1820-76) フランスのオルガニスト、作曲家。1840年ローマ賞受賞。著書『すべての音部記号によるレッスン *Leçons sur toutes les clefs*』、『小旋律ソルフェージュ、理論と実践 *Petit solfège mélodique, théorique et pratique*』など。
- 58 Durand, Emile (1830-1903) 有名な和声教授。著書『初歩のソルフェージュ *Solfège élémentaire*』、『旋律ソルフェージュ *Solfège mélodique*』など。
- 59 Le Couppey, Félix (1811-87) ピアニスト、作曲家、教育者。著書『ピアノのABC *ABC du*

- piano*』、『アルファベット *Alphabet*』など。
- 60 Savard, Augustin (1814-81) フランスの作曲家。
- 61 Lescat, Philippe, *op.cit.* p.164.
- 62 軍楽ギムナジウム設立目的は、軍隊に必要な音楽家を提供し、軍隊の吹奏楽を改善することにあった。
- 63 本文 p.48参照。
- 64 Alten, Michèle, *La musique dans l'école* (Issy-les-Moulineaux, 1995), p.16.
- 65 本文 p.47参照。
- 66 Duruy, Victor (1811-94) 公共教育大臣。
- 67 Pierné, Gabriel (1863-1937) フランスの作曲家、指揮者。
- 68 本文 p.47参照。
- 69 Thomas, Ambroise (1811-96) 音楽院でカルクブレンナー-Kalkbrenner (ピアノ) とルシュール (作曲) に師事。1832年ローマ賞受賞。《ミニヨン》(1866) を作曲。
- 70 試験の聴音課題は、1902年まで原則として女性の声で歌われ、その後オルガンで奏されるようになった。
- 71 “Lettre de Ambroise Thomas à Albert Lavignac”, Paris, 12 décembre 1882. なお、「試験 examens」は進級試験であり人数制限はないが、「コンクール concours」は前もって合格者数が決定されている。
- 72 注 1 参照。
- 73 Danhauser, Adolphe (1835-96) 1863年ローマ賞受賞。1875年には声楽教育査察官にもなる。
- 74 現在もなお使用されており、1996年以後は「増補改訂版」(ルモワーヌ社) と両方が用いられている。
- 75 Marmontel, Antonin 音楽院でソルフェージュも教えたピアニスト、アントワーヌ＝フランソワ・マルモンテル Antoine-François Marmontel (1816-98) の息子。「叫ぶのは歌うことではない」という言葉は現在もなお有名である。
- 76 Dubois, Théodore (1837-1924)、フランスのオルガニスト、作曲家、教育者。1859年ローマ賞受賞。《キリストの7つの言葉》(1867) を作曲。
- 77 Savard, Augustin ピアニストのオギュスタン・サヴァール Augustin Savard (1814-81) の息子で、父も音楽院のソルフェージュ教授。
- 78 Combarieu, Jules, “À propos de dictée musicale,” *Revue Musicale*, no.23, 1906, p.322.

## Le Solfège : Quel enseignement pour demain ?

Laurent TEYCHENEY

Le solfège est le véritable cœur pédagogique de toute institution musicale.

Garant de l'apprentissage des notions musicales fondamentales (écoute, lecture, intonation, rythme...), son enseignement repose sur un subtil équilibre entre pratique (individuelle/collective) et théorie (principes/analyse), débouchant sur une autonomie indispensable à une meilleure conscience artistique, à une interprétation plus riche, à une créativité mieux sollicitée.

Le solfège est au service de l'art, de la musique, de l'homme; à ce titre il se fait un honneur d'encourager et de participer activement aux réformes pédagogiques indispensables dans un monde en perpétuelle mutation, tout en veillant bien naturellement à préserver l'âme d'un enseignement productif de qualité.

Le solfège a une longue histoire, qu'il appartient à tout enseignant responsable d'approfondir et de faire connaître, ainsi sera-t-il plus considéré des étudiants, plus reconnu de l'ensemble du corps professoral, ainsi surtout pourront jaillir sereinement les éléments nécessaires à une réflexion de fond sur les perspectives d'un enseignement de demain plus cohérent, plus humain.

Après plus de vingt années d'expérience pédagogique et de direction administrative, je compte donc y contribuer également par ce modeste article qui, faisant suite à celui que j'avais publié en 1998 pour l'université musicale Shôwa, est présenté en trois parties:

1. Le solfège en France au XIX<sup>e</sup> siècle.
2. Du solfège spécialisé à la formation musicale: XX<sup>e</sup> siècle.
3. Situation actuelle et perspectives d'avenir.

Enfin, je me fais ici le bonheur de laisser conclure le poète Malcolm de Chazal : "La méthode actuelle d'éducation musicale consiste à faire l'élève jauger les sons. La méthode future consistera à lui faire ouïr le silence, à lui faire faire le solfège de l'état sans bruits..."

J'aime le solfège !